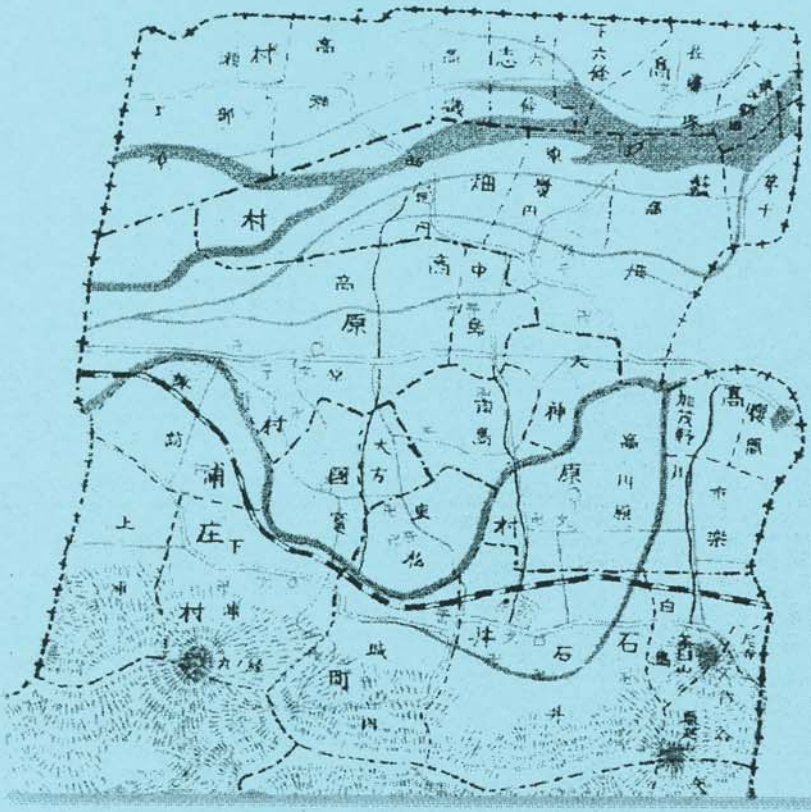


文書館の逸品展

古文書が語る

石井の歴史

かつての藍作地帯の中心部に位置する名西郡石井町。
庄屋の家などに遺されていた古文書を通して、江戸時代の石井の歴史を紹介します。



開催期間

平成29年

1月31日(火) ~ 4月23日(日)

開館時間 午前9時30分~午後5時

場所 徳島県立文書館2階 展示室

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合その翌日)
毎月第3木曜日

展示解説 2月26日(日)・3月26日(日)

入場無料



文化の森総合公園 徳島県立文書館

Tokushima Prefectural Archives

770-8070 徳島市八万町向寺山

Tel.088-668-3700 FAX.088-668-7199

<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp/>



ごあいさつ

当館では、年4回の企画展のうち1回を「文書館の逸品展」として、特定の地域に関わる古文書等を紹介した展示を開催しています。今回は「古文書が語る石井の歴史」と題して、現在の石井町域に伝えられた庄屋文書や藍師・藍商関係文書及び絵図などを取り上げて、江戸時代から明治時代にかけての同地域の歴史を紹介します。

昭和30年(1955)に石井町・浦庄村・高原村・高川原村・藍畑村の5ヶ町村が合併して成立した現石井町は、吉野川下流域右岸の沖積平野に立地し、古くは国府の隣接地として、また近世には城下徳島の近郊農村として発展してきました。町域の北部には、かつて物資輸送の大動脈であった吉野川が流れ、南部には伊予街道が東西に走るという交通上の要地でもありました。

現在の町域には、江戸時代に26ヶ村が存在していました(「元禄郷帳」)。そのうち藍畑・高原・高川原を中心とした地域には、吉野川のたび重なる氾濫によってもたらされた客土により、阿波を代表する藍作地帯が形成されました。これを背景に、藩内でも有力な藍商が輩出しました。高島村(現石井町藍畑)組頭庄屋の小川八十左衛門や東覚円村(同前)の志摩利右衛門は、この地域を代表する大藍商で、江戸中期から後期の藩政改革にも貢献した人物でもありました。東覚円村で藍業を営んだ天野家の文書には、当時の藍師・藍商の経営形態を知ることのできる帳簿類が残されています。

一方で、宝暦6年(1756)には高原村の藍作農民が中心となり、藍作税の廃止と玉師(藍玉製造業者)株の撤廃を求める五社宮一揆が企てられ(「高原村五社一卷」)、藍作税をめぐる藩と農民層の対立した状況が現れています。

また、この地域では水との闘いにも注目すべきものがあります。当地域を描いた江戸時代の絵図には、吉野川の氾濫による被害の状況を描いたものが残されています。明治期になると、「八ヶ村堰訴訟事件」が地域の大きな社会問題として起こりました。明治8年(1875)、国や県が進める吉野川改修工事にとまなう八ヶ村堰の埋め立てをめぐる流域住民が訴訟を起こすという一大事件が発生しました。その後、明治21年(1888)には西覚円村の堤防決壊によって、被害を受けた住民が改修工事の中止を求めるという紛争(「覚円騒動」)が起こりました。吉野川流域に暮らす人びとの、厳しい生活の一面がうかがえる出来事と言えます。

本展では5つのテーマに分けて、それぞれ関係資料の解説をとおして地域の歴史を紹介しています。庄屋文書に見る村人の暮らしやこの地域出身の幕末・明治期の学者・文化人についても古文書や絵図・和本から紹介しています。

今回の展示が地域徳島の豊かな歴史と文化を知る場となり、あわせて歴史資料を後世に残し伝えることの大切さを考える機会となることを願っております。

最後になりましたが、貴重な資料をご寄託いただいた所蔵者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年1月31日

徳島県立文書館長 山下知之

江戸時代から明治時代にかけての石井

名西郡の北東部、吉野川下流域の平野部に位置する現在の石井町域は阿波国府に隣接し、弘法大師伝説を伝える童学寺、阿波国分尼寺跡や奈良時代の創建と推定される石井廃寺跡、養老7年(723)銘の阿波国造墓碑(中王子神社蔵)があるなど、古くから開発が進んだ地域である。

江戸時代には26ヶ村が存在しており、吉野川に近い北部の村々は江戸時代中期以降阿波国を代表する藍作地帯として発展し、四国山地に接する南部の村々では稲作と藍や麦などの畑作の混合地帯となっていた。また、徳島城下にも近く、交通の大動脈である吉野川や伊予街道が東西に走っている。

阿波藍を中心とする活発な経済活動が展開し、数多の大藍商を輩出している。江戸時代中期の明和の藍政改革を主導した高島村の小川八十左衛門や、天保の藩政改革で活躍した東覚円村の志摩利右衛門もこのような大藍商の一人であった。宝暦6年(1756)、藩の藍専売制に反対して、高原村(現石井町高原)の農民が中心となった一揆が計画される。この五社宮一揆は事前に発覚し、翌年首謀者とされた5人が処刑されるが、人々は彼らを義民として秘かに祀り続けていった。

この地方の歴史は水との闘いの歴史でもあった。江戸時代にもたびたび洪水被害に見舞われており、町内に残る地盤を高く築いた上に建つ屋敷や堤防の高さを決めた「印石」はその名残である。宝暦2年(1752)には、吉野川本流(現旧吉野川)流域等への農業用水を確保するための第十堰が築造される。その後、明治8年(1875)には県が進める治水事業をめぐって、自由民権結社「自助社」の支援を受けた地域住民が県を訴えた「八ヶ村堰訴訟事件」が発生。明治21年(1888)には、洪水による堤防決壊の被害を受けて、国による改修工事の中止を求める「覚円騒動」が発生している。このような治水事業をめぐる紛争に一応の決着がつくのは、昭和2年(1927)の吉野川第一期改修工事の完成を待たなければならなかった。

明治30年代以降、地域の主要産業であった藍作はドイツの人工染料の普及などによって急速に衰退していく。これに対して、明治39年(1906)着工の麻名用水など用水網の整備により耕地の水田化が進められていった。また、藍から桑への転作も進み、藍商から製糸業へ転向する者も登場した。

明治11年(1878)、名西郡役所が石井村に設置される。同22年(1889)の町村制施行により石井(同40年に町制施行)・高川原・藍畑・高原・浦庄の5ヶ村が成立。昭和30年(1955)にこれらの町村が合併して現在の石井町が成立している。

今回の展示は当館収蔵資料を通して、江戸時代から明治時代にかけての石井の歴史を紹介するものである。

阿部家文書に見る村人のくらし

名西郡上浦村（現石井町浦庄）の庄屋阿部家文書には、当時の村の生活や社会の様子を窺うことができる貴重な資料が残っている。

◎奉願上覚（行き倒れ遍路土葬許可願）

天保8年(1837) アヘケ00024

天保8年5月美作国（現岡山県）出身の弥五郎夫婦が四国遍路を続ける中、名西郡上浦村にさしかかったところ、妻ぢうが病気になり倒れてしまい、その二日後に弥五郎の介抱もむなしく死亡した。当時は過酷な旅だったため、こうした行き倒れ遍路が死亡する事も少なくはなかった。

江戸時代の徳島藩では、四国遍路に通行手形・舟揚切手（四国上陸証明書）・入切手（阿波入国証明書）の所持を義務づけており、不所持の者は即刻領外強制退去となる厳しい処分があった。所持している者が死亡した場合、規定により組頭庄屋などの検分を受けた上で、僧侶による葬儀と墓地への埋葬が行われた。また不所持の場合は、葬儀はなく遺体は土葬のみ行われる事になっていた。弥五郎は四国遍路に必要な通行手形は持っていたものの、高価な舟揚切手と入切手を持っていなかったため処分の対象となるのだが、妻の死亡原因は間違いなく病死だから注進（検分）を取りやめ、土葬にしてやって欲しいと上浦村庄屋に嘆願する。

同日付の庄屋から組頭庄屋への覚書には、「往来手形に印形を添え注進申し上げます」と報告されている。無事土葬されたのか、遍路を続けられたのか、その後の顛末は不明である。

◎仕上ル御請書之覚（藍作地帯の組頭庄屋から百姓への触書と請書）

天保8年(1837) アヘケ00037

飢饉時における飯料節約のため、藍作百姓への食事回数を一日5回から1回減らし4回にせよという、組頭庄屋からの触書と百姓代表13名による請書である。

徳島藩では、飢饉の影響はそれほどものではなかったようだが、度重なる飢饉に米・麦が高騰、藍玉も思うように捌けなくなり金銀の流通が停滞するという事態に陥った。しかし、たとえ食事の回数を制限されても不満を洩らさず健気に村人が助け合い、食料を貯えようとしていたようである。

石井の藍商

石井町は、吉野川が生み出した広大な平野部に位置し、特に北部の吉野川に近い高畠・覚円・高原・中島（現石井町高原）・天神（現石井町高川原）などは、江戸時代における阿波を代表する特産物である藍の栽培が最も盛んな地域であった。ここでは西覚円村の天野家文書を中心に、藍に関する資料を紹介する。

◎ 玉師西覚円村天野家の帳簿等

西覚円村の天野家は、江戸時代から明治にかけて玉師（藍師）の家で、同村の市川重兵衛家から儀兵衛が独立し、野上屋・藍屋の屋号や元の市川姓を使うこともあった。またその後代々儀平を襲名している。

藍師の経営に関する一番古い帳簿として文化9年（1812）の「葉藍調日記」（アマ200674）が残っている。「葉藍調日記」は、原材料の葉藍の仕入れに関する帳簿で、周辺の高原村・石井村（現石井町石井）・国実村・諏訪村（現石井町浦庄）・高瀬新田（現上板町高志）などから葉藍や切葉の購入のみならず、撫養（現鳴門市）から^{にしんかす} 練粕・^{いわし} 鰯（関東産、中には北海道産の練粕なども含まれる）などの肥料の購入についても書かれている。

藍玉の販売については数は少ないが、「藍売帳」（アマ200116）などある。また、藍の販売に関わる資料として藍玉の色見本である「^{ていたがみ}手板紙」（アマ200035ほか）がある。さらに明治31年（1898）には「^{にわり}甲州部荷割書抜」（アマ200016）と「甲斐国販売控」（アマ200017）があり、天野家が甲斐国（現山梨県）に商圈を持っていたことがうかがえる。また、藍作に必要な魚肥の販売について「肥魚売掛帳」（アマ200204）が残されている。

天野家の経営は、葉藍・^{すくも} 藻などを自作または近隣から購入し、自宅で藍玉を作って阿波国外に売るという藍師としての経営とともに、撫養町の肥料問屋を通じて^{ほしか} 干鰯や練粕などの肥料を買い、近隣の藍作農民に販売することで成り立っていた。こうした、玉師と肥料商を合わせた経営はこの地域の藍商として典型的なものであったといえよう。

◎ 国実村近藤家文書の肥料購入

国実村近藤家文書の中に、坂東貞兵衛が国実村栄次郎（近藤）に宛てた「覚」（コト00231）がある。これは近藤栄次郎が藍作の肥料である練粕12俵を坂東貞兵衛（印判に藍問屋とある）から購入し、代金を支払った領収書である。同じ閏4月6日に出された文書として、綿10俵・練粕12俵分の帆別銀（船にかかる税）を上助任御分一所（税関にあたる役所）に支払っている文書がある。これには辰とあり、明治元年（1868）のものであることがわかる。

水をめぐる人々の闘い

明治8年(1875)、西覚円村(現石井町藍畑)にあった八ヶ村堰の改修をめぐって、これに反対する住民が県を訴えた「八ヶ村堰訴訟事件」が発生した。その後、明治21年(1888)には、洪水による堤防決壊の被害を受けて、国による改修工事の中止を求める「覚円騒動」が発生した。これらの事件に関する一連の文書群が天野家文書に残されている。その一端を紹介しよう。

明治8年9月30日に東・西覚円村と高島村の51名が当時の名東県に宛てた「新堤防之義ニ付上願」(アマ200615)という文書がある。これにはまず、同年8月8日、改修工事に反対する石井村他8村が、新堤防建設の差し止めを大坂上等裁判所^{まかな}へ訴えたことが記載されている。当時、新堤防の費用は、すべて地元負担で賄われることになっており、その課出金^{かしゅつ}は村ごとにおのおの所有する土地の反数で割り振られていた。当然、新堤防建設に反対する石井村他8村の課出金は入らない。そうなれば、各村の課出金が多くなる。それをどうにかして欲しい、というのがこの「願」の内容である。

この石井村他8村が起こした訴訟は、一旦は明治9年(1876)6月20日に原告敗訴で終わる。しかし、同年9月4日大審院に上告したところ、翌年2月大審院は審議差し戻しとしている。

では、なぜ新堤防建設に石井村他8村が反対したのであろうか。そのことを語る文書が、当時の県が大審院に答える形で作成された、明治10年(1877)10月10日の「新築堤防^{ならびに}并八ヶ村堰水溜故障之答」(アマ200619)である。

これによると、八ヶ村堰^{かさあげ}を嵩上げすることは、上流にある越流堤である知恵島堰(現吉野川市鴨島町)に負担をかけ、これが決壊すると石井村他8村に影響が出る。八ヶ村堰訴訟における東・西覚円村と石井村他8村の対立は、八ヶ村堰と知恵島堰のどちらを優先させるか、という議論でもあった。また、課出金等に見合うだけの利益を得ることができるのか、に関する各村の利害対立^{いんていかいちく}でもあった。

明治20年(1887)、西覚円村の57名が内務大臣山縣有朋に対して「引堤改築御延期之義ニ付請願」(アマ200641001)を提出する。前年から国や県が進めていた吉野川改修工事により土地を奪われる西覚円村側が、工事の9年間の猶予^{ゆうよ}を求めたのである。この請願に対して山県は「聞届難シ^{ききとどけがた}」としている。

翌年の吉野川の大洪水により東・西覚円村の堤防は破堤。被害を受けた地域住民が損害金下付などを求める「覚円騒動」が起こり、これらを受けて改修工事は中止に追い込まれる。

治水事業はそれぞれの地域の利害に大きく左右される。水との闘いは、人との闘いでもあった。

石井が生んだ幕末・明治の学者

石井町は城下町徳島近郊の農村であり、また伊予街道の通り道であったため、人々の交流も活発であった。そのため、積極的に学問をする人々が育つ環境にあった。ここでは、石井町が生んだ幕末・明治期の学者として、明治初年徳島藩校の洋算学の教員となった清重梅吉と在野の国学者であった上田寧恵を取り上げる。

◎ 清重梅吉と洋算学

清重梅吉は、嘉永2年(1849)高川原村(現石井町高川原)に生まれ、祖父に学問を授けられた後、長崎で蘭学修業をした。徳島へ帰還後、明治3年(1870)10月徳島藩校長久館の洋算2等助教として出仕し、翌4年(1871)8月には1等助教となる。長久館出仕については辞令(キヨシ00044~

清重梅吉の辞令



47) とともに、当時同僚であった杉原専方(正一、長久館洋学の助教、のち静岡県^静の教育界で活躍、静岡精華女学校を創設した)と一緒に撮影した写真が残っている。その後、同6年(1873)には上京し私塾を開いたというが、同8年1月10日に病没。まだ26才であった。

清重家には、梅吉の関係書籍と思われる、洋学・算学の書籍が残されている。まず、オランダ語の文献として『譯和蘭文語』の写本、箕作阮甫翻刻『和蘭文典』(前編・後編2冊)、『増補改正譯鍵』(全5冊)の写本などがある。これらには、清重梅吉の名が記されたものがあり、蘭学修業時代に集めたものだろう。

算学の書籍としては『割圓表』(上下2冊)(森正門編、三角関数の研究書、安政3年、徳島藩が出版)、『明元算法本術』(乾の巻・坤の巻、合本1冊)(柴田理右衛門清行編、元禄2年序)などがある。

◎ 上田寧恵と国学

上田家は江戸時代は高原村の村役人の家であったようだが、上田寧恵は明治になり神官・教育者として活躍した。また、国学の立場から地元である古代・中世の名方郡(名西郡・名東郡の古名)の郷名などについての研究を行い、文献を残している。それは現在小杉榎邨編『徴古雜抄続編 阿波十一中』に上田寧恵「名方郡産土神郷名考」として収められている。

その郷名等を絵図として書きあらわしたものが、「旧名方郡郷名値図」(明治7年(1874)11月、上田寧恵秀訂)である。

展示資料一覧

No.	表 題	年 代	備 考
江戸時代から明治時代にかけての石井			
1	慶長九年御検地帳之写 庄野四郎兵衛様御水帳之写	嘉永5年(1852)	キヨシ00012
2	(名西郡国実村棟付御改帳)	明暦3年(1657)	コト00017
3	名西郡之内国実村棟附人数御改帳	延宝2年(1674)	コト00014
4	享保三戊戌歳名西郡国実村棟附人数御改帳	享保3年(1718)	コト00047
5	仕上ル目録之覚	天保9年(1838)	アヘケ00015
6	寺沢主馬様御年貢御請帳	(幕末期)	コト00001
7	高原村五社一卷	安政6年(1859)	トキ00004
8	かどや日記	文化5年(1808)	トキ00001～3
9	中島錫胤書簡	明治32年(1899)	シマケ00049
10	名西郡西覚園高原両村境出入ニ付御見分之上落着被仰候境目絵図	享保5年(1720)	アマ200123
11	名西郡高島村癒上り絵図 複製	寛保2年(1742)	石井町教育委員会蔵
12	名西郡図(分間図) 複製	文化9年(1812)	個人蔵
13	阿波国名西郡白鳥村絵図 複製	文久2年(1862)	徳島県立博物館蔵
14	名西郡北方村々絵図 複製	(明治初期)	個人蔵
阿部家文書に見る村人のくらし			
15	奉願上覚	天保8年(1837)	アヘケ00024
16	用水修繕之義ニ付願	明治9年(1876)	アヘケ00103
17	藍玉商業ニ付願	明治6年(1873)	アヘケ00051
18	御制服始質素儉約御取究ニ付仕上ル御請書	天保13年(1842)	アヘケ00105
19	仕上ル御請書之覚	天保8年(1837)	アヘケ00037
20	十二月十六日婚礼献立	(年代不詳)	アヘケ00124
石井の藍商			
21	葉藍調日記	文化9年(1812)	アマ200674
22	藍搗立控帳	明治30年(1897)	アマ200031
23	藍売帳	(明治期)	アマ200116
24	甲州部荷割書抜	明治31年(1898)	アマ200016
25	肥魚売掛帳	明治13年(1880)	アマ200204
水をめぐる人々の闘い			
26	新堤防之義ニ付上願	明治8年(1885)	アマ200615
27	堤防ニ付防禦御願	明治10年(1887)	アマ20060516
28	新築堤防并八ヶ村堰水量故障之答	明治10年(1887)	アマ200619
29	引堤改築御延期之義ニ付請願	明治20年(1887)	アマ200641001
石井が生んだ幕末・明治の学者			
30	和蘭文典前編・後編	安政4年(1857)	キヨシ00002～3
31	増補改正譯鍵	安政4年(1857)	キヨシ00005～10
32	割圓表卷之上・卷之下	安政4年(1857)	キヨシ00014～15
33	清重梅吉(辞令書 学校2等助教申付、分洋算学)	明治3年(1870)	キヨシ00044
34	清重梅吉(辞令書 学校1等助教申付、洋算学)	明治4年(1871)	キヨシ00047
35	旧名方郡郷名値図	明治7年(1874)	上田家文書

*資料保存のため、期間中展示品が替わることがあります。

☆担当職員による展示解説 (文書館2階講座室・展示室)

日時:2月26日(日)・3月26日(日) 午後1時半より

文書館の逸品展
「古文書が語る石井の歴史」

平成29年1月31日発行

編集・発行 徳島県立文書館